



巻 頭 言

偶然性を味わうこと

顧 問

山松 質文

誤解のないように、偶然ということ、偶然を当てにするということとは全く正反対のこと、全く予期しない、無意図的な、ひらめきといったものを、誰しも経験されたことがあると思う。それをたわごととして、あっさり、葬り去るものではなく、じっくり味わってみることだ。

私が、心理治療にかかわって以来、特に音楽療法にかかわって以来、私の発想が、ほとんど偶然を大切に、味わうという心境で迎えると、楽しくもあり、芋蔓式に展開していくのである。

習慣というものは、おそろしいもので、多くの人、知識をたよりに生きているように思われる。本を読む、感動して信ずる、この感動経験は大切なことだが、一体何に感動するのか、その「何」が問題なのである。うのみにするとしたら大変である。

読んでいる自分は一体何なのか、本で特に知識というものをうのみにせず、その感動の内包を吟味してみる必要がある。

心理治療や音楽療法などという分野では、知識というものが巾をきかせて、大切な感動経験を疎かにするような傾向があるやに見受けられるので一寸忠告めいたことを申しあげる次第である。

付 記

さてここでどうして今のセッションはそんなに素晴らしかったのか、(クライアントには聞けないが)演奏者なり心理治療者にきいてみると、きまって、「今日は何も考えないで臨んだ」「無我夢中だった」などというのである。その反対に「どうも今のセッションはぎくしゃくしていた。感動するものがなかった」と観ていて感じた場合は、彼らから「今日は意図するところがあった」という答えがしばしば戻ってくるのである。

著 者

「障害児のための音楽療法」(大日本図書あとがきより)
現代心理学ブックス71 初刷1984

日本音楽療法学会第2回学術大会開催にあたって

森 忠三 日本音楽療法学会第2回学術大会 大会長

この度日本音楽療法学会第2回学術大会（第2回全国大会と略す）の大会長に選出していただき、その責任の重さを痛感している。日本音楽療法学会第1回学術大会の意義は日本バイオミュージック学会と臨床音楽協会の二つの学会組織の統合をなし遂げた記念すべき学術大会である。第2回全国大会では統合された学会の演題発表の質の向上を目指して、今後の学術大会のあり方のモデルとなる方向を模索したいと考え、以下の3項目について企画立案した。1. 発表演題抄録の査読と訂正のコメント、2. 大会テーマの選択とシンポジウムの公開公募、3. 採択した全演題を口答発表とし、ポスターセッションを中止した。これらの3項目を取り上げた理由について述べたいと思う。

1. 発表演題抄録の査読と訂正のコメント

第1回日本音楽療法学会近畿学術大会（第1回近畿大会と略す）を第2回全国大会のプレ集会和位置付けて、発表演題抄録の査読と訂正のコメントが企画立案された。第1回近畿大会から演題抄録の査読と訂正のコメントが開始され、第2回日本音楽療法学会近畿学術大会（第2回近畿大会と略す）においても査読と訂正のコメントが実施された。第1回・第2回の近畿大会において実施された査読と訂正のコメントの経験が第2回全国大会の場合にも行われるようになったことは大変意義のあることと言える。第1回近畿大会の実行委員会が演題抄録の審査委員を委嘱し、第1段階審査は1題の演題抄録に3名の査読者が担当した。この3名の査読者はお互いに相談することなく別々に評価を行うことにした。評価は3段階方式で、A評価とは抄録の内容の水準が合格点に達していて、訂正の箇所が誤字、脱字の程度の場合である。B評価とは抄録の記載の内容に訂正を必要とする箇所が見出され、訂正すべき箇所に対する査読者のコメントが記載される場合である。C評価とは抄録の内容の水準が低く、第1回近畿大会での発表にふさわしくない場合である。この場合にはどの箇所がふさわしくないかを、査読者はコメントを記載する必要がある。第2段階審査は大会長森、実行委員長大前、事務局長益子の3名が、全演題抄録について第1段階審査の評価を再確認しながら、査読者による不公平を是正し、基本的にはBBC以上の方に発表の通知を発送した。BCC、CCCの評価の演題抄録にはなぜ発表にふさわしくないかを丁寧に文書で通知した。

この発表演題抄録の査読と訂正のコメントの企画は今後の

学術大会にとって重要な意義を持つものと考えられる。一つは発表演題抄録の内容の充実であり、次は査読と訂正のできる人材の育成ができるという点である。

2. 大会テーマの選択とシンポジウムの公開公募

大会テーマの選択には課題研究委員会の委員が検討を重ねて第2回全国大会のテーマを『日本の文化的土壌と音楽療法』と決定した。このテーマによるシンポジウムを企画し、シンポジウムに相応しい発表演題の公開公募を実施した。公開公募の演題抄録を課題研究委員会で検討した結果、シンポジウムには3名の演者が選出された。他の内容の良い5名の演者は大会テーマに関わる研究発表として全員の前で発表することにした。このシンポジウムの公開公募の企画は今後の学術大会にとって重要な意義を持つものと考えられる。まず大会テーマとシンポジウムが連動していることであり、次はシンポジストの人選の過程が公開され明確になっている点である。このシンポジストの人選の過程の明確化は情報の公開の時代に必要なことと考えられる。

3. 採択した全演題の口答発表とポスターセッションの中止

採択した全演題の口答発表の時間は15分間で質疑応答の時間は5分間である。第1・2回近畿大会では座長を2名とし、口答発表の15分間を厳守した。同様に質疑応答の5分間も厳守した。ポスターセッションの中止の理由は、いろいろと検討した結果、採択した演題を口答発表とポスターセッションでの発表とに区別する意味はないという結論に達したからである。

この採択した全演題の口答発表の企画は今後の学術大会にとって重要な意義を持つものと考えられる。特に発表時間の厳守は学術大会のあり方として極めて重要なことと考えられるからである。第2回全国大会では武庫川女子大学の講堂が2550名の席が可能なので大変助かっている。また交流会の企画にも工夫を凝らした。この企画の成功することを願っている。第2回全国大会の準備のために大前哲彦実行委員長、益子勉事務局長、安本義正事務局次長の下で60名の役員・委員が情報の技術を駆使して努力していただいていることによりこのような規模の大きな学術大会も可能になったと考えられる。平成15年3月上旬に会員の皆様と関西でお会いできることを楽しみにしている。

■ 第2回日本音楽療法学会学術大会の成功にご協力を ■

〈第2次案内の補足〉

大会長 森 忠三
実行委員会委員長 大前 哲彦
実行委員会事務局長 益子 務

全国各地で音楽療法の実践、研究に励んでおられる会員の皆さん、第2次案内は見ていただいたでしょうか。表紙は大会テーマ「日本の文化土壌と音楽療法」にちなんで手鞠をあしらっています。第2次案内の冊子は実行委員会に申し込まれたら郵送しますので会員外の方にもお誘いいただき、大会を盛り上げていただけますようお願いいたします。

皆さんをお迎えするために、近畿支部の各委員会が実行委員会の該当委員会を担当する形で総力をあげて準備を進めています。とりわけ武庫川女子大学の周辺に居住している会員で組織された実務者会議のメンバーが、各委員会で決められた事項を具体化し、アルバイト学生をリードしながら参加申し込みのコンピュータ入力や全国からの問い合わせに対応しています。

また、この紙面をお借りして報告しておきたいことは、全国の会員の方々の絶大なご支援を受けながら準備を進めていることです。まず、第1回大会の実行委員会事務局（加藤美知子事務局長）メンバーに顧問委員をお願いしていますが、多くの資料提供から経験や教訓を伝えてくださっています。学会本部の研修・講習部会（村林信行会長）の支援は講習会を共催していますから言うまでもありません。また、今回の研究発表の申し込みは学術研究72件、事例研究263件でした。これに対する査読委員は近畿支部内では賄いきれず、全国の支部に推薦を依頼して100名を超える査読体制を組んでいます。これから関東圏以外で大会が開催される場合は、この種の全国的な支援体制は不可欠のように思います。

1、音楽療法学会としてのアイデンティティを求めて

音楽療法は音楽、医療、臨床心理、福祉、教育などの学際的な科学であります。また、日本音楽療法学会は、二つの学会の統合による新学会であるために、研究の方法から発表形式に至るまで多くの差異を持っています。そのため学術大会を開催するにあたり、忌憚のない論議から始めました。医学関係の学会では医局で目的・方法・結果・考察を簡潔に発表できるように徹底的に教育されます。この方法を吸収する大切さを感じながらも、音楽療法は対象者と音楽療法士の間の人間関係の発展に本質があるために、結果と考察を簡潔に述べただけでは質疑応答に発展しないばかりか、研究発表（音楽療法実践の事例を集積して法則化をめざす目的）の意味すら見失いかねます。

そこで、音楽療法学会の場合は実践の学として実践分析を大切に、実践家にとって敷居の高い学会にしないことを確認しました。そして、従来、「研究」という言葉に引きずられて事例分析においても「研究の目的」からはじめて「音楽療法の目標」が曖昧になる問題を考え、「事例研究と学術研究に区分して審査します。」と明記しました。そして事例研究の場合は「対象者および目標」「方法」「経過および結果」「考察」を、学術研究の場合は「研究の目的」「方法」「結果」「考察」「結語」を簡潔に記載することを求めました。これは学術研究を軽視するものではなく、「事例研究の場合でも、その事例によって音楽療法に関する理論や新しい知見を明らかにすることに力点があるものは、学術研究として応募してください。」と案内しました。

これは発表時間における10分と30分の違い、学術研究と事例研究の名称問題に集約されました。後者については、一方を学術研究と呼称した場合、事例研究が学術的価値のないものと規定することになる危惧を感じたのです。そこで、発表時間を20分とし、事例研究と学術研究の順に並べることで合意することになりました。

以上は、プレ集会として開催した第1回近畿学術大会を通して確認してきたことです。この模索は、「研究発表抄録に対する査読のガイドライン」と「倫理審査のガイドライン」の文章化へと発展しました。このガイドラインを作成したのは、音楽療法がそれぞれ固有の研究方法をもって蓄積されてきた諸科学の学際的な位置にあることを踏まえ、関係者の相互理解と公平性を確保するため、一つの試論です。また、新しい科学として社会的な認知をもとめなければならず、音楽分野からの参画者は医療、その他から学び、医療分野からの参画者は音楽、その他から学ぶという相補性が不可欠になる発展途上の学という認識によるものです。本来、学会は自立した研究者の組織であり、相互教育的な配慮は馴染まないものです。将来において音楽療法の研究・実践者の自己形成が、個々の教育機関によって担われる体制が確立した暁には、廃止されるべきであると考えています。しかし、今しばらくの間は、音楽療法分野の先達による若手への教育的配慮、他分野の専門家による相互助言をえる査読・推敲を実施することによって学会の研究レベルを高め、社会的な認知に繋げたいと考えました。

学会本部の学術・研究委員会がプロジェクト研究を募集するなど、学会の内実を整えつつありますが、第2回大会も、それらに寄与できればと考えています。

2、託児の実施

研究発表の希望者から託児体制が求められました。会場校の前向きな対応で施設が確保できることになりましたので、保育士と保育専攻の学生の協力を得て実施できることになりました。

場 所：武庫川学院附属幼稚園（大会場から幼児の足で徒歩5分）
日 時：3月8日（土）、9日（日）、午前9時～午後6時（7日は、通常の開園中ですから託児はできません。）
費 用：3,000円／1日（おやつ、傷害保険代を含む）
対 象：就学前の幼児（1歳以上）
特記事項：アレルギー、食事制限、緊急時の連絡体制を明らかにし、昼食時は保護者が引き取ること。
申し込み：2003年1月31日（金）までに実行委員会事務局へ。

3、小テーブル交流のテーマ（世話人）の募集

先着500名まで受付し、参加費4,000円は料理・飲み物に当てますからご期待ください。しかし、楽しく語らいながら食事をすると味も格別のものになります。11月末の締め切りで世話人を募集していますが、今のところ「ベイする音楽療法」、「発語を促す音楽療法」、「ターミナルケア」などの応募をいただいています。これらは1月末にお届けする最終案内に全文を掲載し、その小テーブルへの参加希望者（交流会への事前申込者に限定）を募ります。自己紹介を含む参加申し込みを小テーブル毎に印刷しておきますので交流に活用してください。

各地の音楽療法団体やユニークな実践をしている集団に自己紹介テーブルの設営を呼びかけています。魅力を感じている特定の楽器や歌、支部活動、学会プロジェクト研究の応募者テーブルなど、思いを共有している方々の参集を呼びかけてください。

懇談の終盤に参加者の心をつなぐような舞台パフォーマンスも募集しています。日野原理事長トークショーの希望も出ています。舞台パフォーマンスという名称が誤解を与えているようですが、出演者を募っているわけではありません。

武庫川女子大学から歓迎のミニコンサートも用意していますのでご期待ください。

4、よろず相談室のご案内

各分野で経験豊かな役員の先生方がわかりやすくお答えする「よろず相談室」を設けます。音楽療法に関するどんな些細な疑問・質問でも、また様々な情報について対応します。ぜひ、この機会をお気軽にご利用ください。

日 時：3月7日（金）、A（12：30～12：50）、B（18：10～18：50）
8日（土）、C（12：30～12：50）、D（17：50～18：00）
9日（日）、E（13：20～13：40）

* 昼休みは来談者控え室で昼食を食べる場所を用意しておきますので、弁当を持参ください。

* 8日の夕刻は、交流会場で相談にのってもらいますから、この時間を希望する方は交流会に参加してください。

相談内容：音楽療法入門、実践に対する不安、論文の書き方、事例研究レポートの書き方、資格認定、資格更新、認定試験、音楽療法と倫理、留学、勉学機関、医学や臨床心理学の勉強法、臨床機会の確保、対象者理解、技法、その他。

申し込み：A4用紙に氏名、所属、連絡先の電話・FAX・E-mailアドレス、臨床経験年数、相談希望内容を記入して実行委員会事務局にFAXか郵送（E-mailでも可）で、お送りください。

* 用紙の下欄に希望の相談時間の記号（ABCDE）を、1位から3位までを区別して書いてください。

* 相談希望内容は、まず、上記の「相談内容」の例示を参考にタイトルを書き、その下に具体的な内容を書いてください。
締め切り：2003年2月20日（木）必着です。

* 当日の申し込みは、よろず相談室会場で受けつけます。ただし、事前の申し込みが優先です。

予約カード：当日、受付にて、他の資料と一緒に予約受付カードを渡しますので、場所と時間をご確認ください。

5、学会のプロジェクト研究応募者へ

第2次案内で、2002年度学会プロジェクト研究の中間報告を演題発表の特別枠であるとアナウンスしていましたが、これらは学会本部の学術・研究委員会から指示されます。第2次案内の12頁で「学会のプロジェクト研究に採択されなかった場合に一般の演題発表を希望される方は、同じテーマで研究発表申込書を提出してください」と案内していましたが、プロジェクト研究に採択された場合でも演題発表は可能です。しかし、演題発表を辞退される場合は、速やかに実行委員会まで届けてください。

6、早めの申し込みを

関西の実質主義の立場から、前泊なしで参加しやすいように講習会を10時30分から開始したり、お一人お一人の出番と料理に力点をおいた交流会を企画していますが、参加費の割引にも注目してください。参加費1万円の期限は過ぎましたが、12月31日までに申し込まれると会員は1万2千円（学生会員は6千円）です。それ以降は1万5千円（学生会員は8千円）になります。

送付先・問合せ先

〒663-8558 兵庫県西宮市池開町6-46 武庫川女子大学内

第2回日本音楽療法学会学術大会実行委員会事務局

TEL：0798-44-3769 FAX：0798-44-3761 e-mail：jmtak@syd.odn.ne.jp

問い合わせの時間帯 月・火・木・金曜 午前10時～午後4時

2002年度第2回講習会のご案内

村林 信行 日本音楽療法学会教育研修委員会研修・講習部会長

2002年に入り、日本音楽療法学会では各地に支部ができ、活動を開始しております。支部が開催する支部会（または地方会）では、研究発表と同時に支部の特色を反映した講習会も開催されております。支部主催の講習会は、会員にとっては、身近なところで情報収集ができるというメリットがあるものと思われま

す。各支部が設立されたことにより、今後学会主催の講習会は会員のどのようなニーズにこたえればいいのでしょうか。2002年度の講習会は新たなテーマを持つことになりました。

この結果、2002年度は学会主催の講習会は2回開催することとしました。1回目は8月31・9月1日両日に東京一ツ橋ホールで開催されました。ここでは、初日は高齢者、2日目は小児をテーマとし、総論（講義）と症例検討（シンポジウム形式）を行いました。そして、クリティカルパスというテーマを題材にして医療の新しい動きを紹介しました。

第2回は2003年全国大会の前日の3月7日（金）に開催さ

れる予定です。全国大会は年に一度全国各地から会員が集まる場所です。講義のテーマも数多く用意して、会員がテーマを選んで参加できるのが特色です。

今回も関西支部の大会実行委員会、講習会担当委員会が中心となって、6会場で24コマにもおよぶプログラムを準備していただきました。内容も音楽領域、心理学領域、医学領域を広くカバーし、これまでの講習会で取り上げられていないテーマも盛り込まれております。講師陣の多くは関西で活躍中です。関西支部の勢いと人材の豊富さを感じる内容です。

今後、会員の研修を充実させるために学会本部と支部がさらに協力体制と役割分担を進める必要があるでしょう。今回はそのモデルケースとしても重要な役割を担う講習会と考えております。

会員の皆様には是非ふるって参加いただけますようご案内申し上げます。

第10回世界音楽療法会議について

栗林 文雄 国際交流委員長

4年ごとに開催される世界音楽療法連盟主宰の世界会議が平成14年7月23日より28日まで英国オックスフォード大学で開催された。オックスフォード市はロンドンの北西にバスで2時間弱の所にあり、全体が博物館のような、石造りの古い教会や宮殿風の建物が立ち並んだ落ち着いた街である。オックスフォード大学はケンブリッジ大学と並び13世紀に創立された英国最古の大学で、35の独立した大学、大学院からなっている。今回の大会では宿舎、研修会場、催し会場として、約1.5キロメートル四方の中に点在しているカレッジや市の建物を使用して行われた。参加者は古い町並みの石畳の道を時間におわれて足早に移動することになった。通常アメリカでのこの種の大会は超大型ホテルで行われるため、大会期間中に一步も建物外部に出ることがない場合すらある。これにくらべると、今回は屋外を歩き回ることが多く、大変に健康的な研修大会となった。会場も100年から古いもので600年くらいの歴史を持つ、どれも国宝クラスの建築物が使用されていて、ほとんどの会場で写真撮影が禁止されていた。大会のテーマは「対話と討議」(Dialogue and Debate)、副題として「21世紀の音楽療法：変化への新たな勢力」とされている。また大会会長はナイジェル・A・ハートレイ氏、同研究委員会委員長はレスリー・バント氏がつとめている。

さて、本題の研修大会であるが、参加者は約40国より700名程度であったようだ。アルゼンチンやブラジルから常連の参加者が少ないようにおもえた。お国が抱える経済的な問題と関係あるかもしれない。しかし国内の景気の悪さにもかかわらずわが国からは総勢30名をこえる参加者があり、まだまだ元気な日本人たちで会場が盛り上がっていた。さて今回は総計して250件の研究が発表されている。その審査に当たる22名の連盟研究委員にはわが国より稲田雅美氏(同志社女子大学)が選出されており、自らの研究発表のかたわら座長としても活躍されていた。私も4年前のワシントンDC大会で連盟研究委員として50件以上の英文、スペイン語での論文を審査した苦しい記憶が生々しくよみがえる。最近世界との交流が増してきたとはいえ、専門的な領域では言語の壁にさえぎられ、諸外国からの刺激が慢性的に不足していると思われる日本の音楽療法士にとって、世界大会などで研究発表することや座長役などを経験することは良い刺激となるであろう。稲田氏の後に続くようなすぐれた人材を育成することの重要性を感じた。また自分自身をふりかえり、世界に広く通用する実力を持つように、井の中の蛙とならぬように、己の研さんをさらに深めなくてはならないという思いを強くした5日間であった。

大会初日、23日の夕食は聖キャサリン大学の大正餐會堂で行われた。体育館ほどもある広い食堂に幅120cmほどの三

列の古い木製のテーブルが連なって並んでいる。イスも同様のベンチ状の長イスである。広い壁面には肖像画が並び、大きな暖炉がみえ、天井がとてつもなく高い。私はこの風景を以前にどこかで見たことがあるように思えた。(後にハリー・ポッターのいる魔法学校ホグワーツの食堂に似ていることに気がついた。)食後ハートレイ氏が簡単な挨拶で、「みなさんが快適にお過ごしかさることを心から願っています」と述べている。本当にその言葉通り快適な滞在であった。食事もおいしく、何と言っても紅茶がうまい。少なくとも今回の大会ではイギリスの食事がまずいという一般の風評は間違いであった。

食後7時45分より開会式が下町のシェルドニアン劇場でもたれ、大会会長ナイジェル・ハートレイ氏(英)、連盟会長デニス・グロッケ女史(豪州)の挨拶の後、音楽会が催された。演奏者は世界的なパーカッションのエベリン・グレインさんである。信じられないようなすごみのある演奏であった。音の本質はエネルギーであることを痛切に実感するような演奏であった。

24日(水)の午前10時から「音楽、文化、社会行動」という題目で基調講演がなされている。演者はナイジェル・オズボーン教授(エジンバラ大学)他2名であった。会場のシェルドニアン劇場の古い木製のイスの座り心地がものすごく悪く、お尻が滑り落ちそうな不安定な状態で苦勞して座っていたのを記憶している。しかしここは国宝級の古い建物内部であり、文句はいえない。午後は研究発表が続いている。25日にも同様の講演がなされている。タイトルは「音楽、意味、関係」とされていて、演者は小児精神科の医師アン・アルバレットさんほか2名である。

今回の様々な催し物で最も印象的であったのは26日(金)夜の「討論会」である。英国風の討議の様式に則り、黒いガウンを着た議長(レスリー・バント)の司会のもとで二組、各5名ずつの集団が自分の主張を述べるのである。テーマは「フェニックス(不死鳥)かドーデー(絶滅した大型の鳥)?音楽療法は21世紀を生き残れるか」である。当初、私は堅苦しくまじめな討論会を想像し、あまり出席する意欲は持っていなかった。しかし友人にさそわれ、会場となったイグザミネーション・スクールの南会議場、前から5列目中央に席を取った。しばらくすると正式な黒いガウン姿のバント議長と討論者たちが静かに入場する。最初に議長が討論の規則を説明し、規則にしたがわない者は退場処分もあることをおごそかに訓告する。このあたりで会場からは笑い声がもれはじめた。最初「音楽療法は21世紀を生き残れない」と主張する5名がその意見を述べた。「より科学が進み、遺伝子治療や予防医療が進歩する将来に「音楽」が医療活動内に生き残る場

所はどこにも見つからない」という意見や、「音楽療法の専門養成のための教育法も確立していないし、内容の水準もまちまちで、つまり信頼性の著しく低い活動であり、将来は自然に消滅してしまうものである」「現代の雑音にちかい騒がしい電子音楽を聞いて育った若者たちには、それらの音楽はもはやいやしの対象にはならない。」などの辛辣な意見が次々と飛び出てくる。発言している人自身が一流の実績を持つ音楽療法士であり、英国風のドライなユーモアを交えながら、会場を沸かせながら演技を交えての発表である。途中で、過激なヤジをとばしたフェニックス派の女性が一人、バント議長により退場処分を受ける。ここで又会場に笑いが起こる。

次に「音楽療法の生き残る」とするフェニックス派5名が主張を展開した。最初の論客は世界音楽療法連盟のデニス・グロッケ会長である。「人間が存在するがぎり、常に音楽も万人のうえに力強く響いている」との主張に会場から大きな拍手がわき起こった。あとに続く4人も音楽が人間といかに密接なものであり、それらが病苦の人々にとっても同等に大切なものであることを力説した。もちろん大拍手である。ドードー派の5名は席を立ち両手を振り上げてこの拍手に抗議し会場の爆笑をさそう。

私は討議全体が喜劇とわかって気楽に楽しむなかに、どこか心に迫ってくるものを感じてしまった。大変に楽しくユーモラスなドードー派の主張のなかにも真実の叫びが秘められ

ていたのではないだろうか。いやむしろ未訓練なセラピストによる、真剣さにかける実践活動がまん延する状態が飽和点にくるときに、これは自然に消滅する運命が待っている活動なのかも知れない、と真剣に考える自分が確かにいた。

最終日の27日、午前10時より市のタウンホールで「音楽、スピリチュアリティ、いやし」と題打った講演があった。基調講演の演者は元ウエストminster寺院の正司祭、マイケル・メイン氏である。この、高齢ではあるが眼光鋭い長身の英国紳士が足ばやに壇上に現れると、氏の全身から立ち上っている一種のオーラを感じて会場は急速に静かになった。しかし氏は開始早々にホールの後ろにかかっている時計が止まっていることをユーモラスに指摘し、会場の雰囲気のを和らげてから話しをはじめている。音楽療法士と共に死の床に横たわる患者達に連れ添い、その心のケアを続けてきた長年の経験をもとに、音楽が彼らに果たした役割を感動的に述べている。いろいろな世界的な会合で体験したさまざまな講演でも最上に位置する内容であったと思う。

今回の会議でのさまざまな体験を振り返ってみて、数年後に心に残っているものは何かと自らに聞いてみる。多数の研究内容や講演と音楽の記憶が一つ一つ浮かんでは消えてゆく。しかしマイケル司教の非常に厳しい表情と、外面に似合わずユーモラスな、心あたたまる言葉のコントラストがみごとであり、しばらく記憶から消えそうにもない。

関東支部の状況から

村井 靖児 関東支部長

関東支部は平成14年2月11日に結成されました。東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城、栃木、山梨、群馬など1都7県にまたがる、全国で一番多い会員を擁する支部です。

現在支部が行っている主な活動は、年2回の支部だよりの発行と、年1回行われる地方会及び講習会の開催です。すでに日本音楽療法学会関東支部だよりの創刊号を2002年5月25日に発行し、また来る10月12、13日には、群馬県伊勢崎市の伊勢崎市民プラザにおいて美原盤大会長のもとに第1回関東支部地方会・講習会を企画し、目下急ピッチで準備を進めています。

関東支部は、支部長村井靖児、副支部長村林信行、事務局長宍戸幽香里、事務局次長郡司正樹以下、会員数の比例配分で各県から選ばれた23名の地方幹事と2名の監事、および

2200名の会員で構成されています。村井が所属する聖徳大学内に事務局を置き、事務局長、事務局次長以下4名の事務局員が支部の日常業務に関わっています。

支部活動の円滑化、積極化をする目的で二つの委員会があり、8名の委員からなる研修委員会は支部主催の講習会、研修会等の企画に当り、6名の委員で構成される広報委員会は支部だよりの発行に関わって支部活動を盛り立てています。

会が発足してまだ半年しか経たないために、支部会員のニーズを適確につかみきれていませんが、まずは、支部としての学術活動を活発化し、地方会員に対する講習会などの便宜を図ることを最初の課題として、同時に、支部会員の声が届きやすい支部実現に努力して行きたいと考えています。



九州・沖縄支部の状況から

斎藤 雅 九州・沖縄支部長

昭和56年頃から「西日本芸術療法学会」にかかわるようになり、昭和63年から数人の同志と共に「九州音楽療法研究会」を発足させ、これまでお世話が続けてきた。研究会では、実力もないのに資格認定申請のための取得ポイントを追いかけるような、見苦しいことはせずに、しっかりとした治療者としての力をつけてほしいと言ってきた。この度、支部組織ができて、九州・沖縄の8県の方々が会員として集まれたが、児童・高齢者・精神科・一般科（ターミナル等）などで夫々専門的にかかっている方から、片手間、興味あり、癒しのセラピーといったなんでもあり(?)の方々まで、幅広くとまどいを感じている。認定を取られたらピタッと顔を出さ

れなくなる人もいる。私としては、いつでも、どこでも、だれでもできるというような安易なものや、安っぽい「癒し志向」的なものではなく、障害児・者の生き方、精神病者の人生、高齢者の最終章における生きざま等の中での音楽・治療・福祉・リハビリテーションといったことを、真剣に考えてくれる人材に集まってほしいと思っている。

また、一方では、学会となり支部組織ができて、地方分権が確立してきたのをきっかけに、中央においても、選挙などを通して、人心を一新し、権威的ではない民主的な組織作りが進むことを願っている。

■ 支部情報 ■

第6回理事会にて北海道および信越・北陸の支部設立が承認されました。

《東北支部》

第2回東北支部学術大会は9月21、22日に開催されました。会場は諸事情により当初予定の秋田県児童会館から岩手大学教育学部1号館に変更されましたが、レベルの高い内容の大会となりました。

- ・講演 生野里花 第一部「音楽療法—ケネス・ブルシアと探る、その広く深い世界—」
第二部「人のこころを支える音楽とは—音楽療法の原点とその応用—」「ワークショップ」
- ・口演発表およびポスター発表

《信越・北陸支部》

近日中に支部役員選出の結果が報告されます。

第1回信越・北陸支部総会・学術集会在2003年5月25日（土）に新潟市で開催されます。詳細は追って告知されます。

《九州・沖縄支部》

2002年度第2回九州・沖縄支部講習会は2003年2月に宮崎県で開催の予定です。詳細は追って告知されます。

学会事務局からのお知らせ

■ 事務局の移転について

日本音楽療法学会は1986年の日本バイオミュージック研究会の時代からパイオニア株式会社より支援を受けておりましたが、学会の法人化に先立ち、このたび独立することになりました。したがって、事務局長の派遣、賛助金および学会事務所、会議室の提供は10月末日をもって終了しますので、事務局の拠点は下記に移転します。2002年11月1日から稼働です。

(月～金曜日 午前9時～午後6時)

〒105-0013 東京都港区浜松町1-20-8 浜松町一丁目ビル6階
電話 03-5777-6220 FAX 03-5401-0337

事務局長は11月1日をもって井形豊徳から越智和雄にバトンタッチされました。事務局長は交代ごとに若返っており、ブラッシュアップされた事務局が期待されます。今後ともよろしく申し上げます。

事務局長 おち かずお
越智 和雄

■ 第1回認定音楽療法士（補）認定試験問題解説集が発行されます

1996年に発表された「カリキュラムガイドライン」適用の音楽療法コース卒業生を対象に、3月10日、第1回の認定試験が実施されました。この試験問題の解答と解説集が発行されます。昨年度の受験者以外の方で入手希望の方は160円切手を貼った返信用封筒（B5サイズ、必ず宛先を書いてください）と1,000円分の切手を同封して、学会事務局へお申し込みください。

■ 「資格認定規則（申請書）」および「資格更新規則（申請書）」の取り寄せについて

270円切手を貼った返信用封筒（A4サイズ、必ず宛先を書いてください）と500円分の切手を同封して、学会事務局へお申し込みください。

* 「音楽療法士認定規則」の配布は会員のみが対象ですので非会員の方は入会手続き（会員番号登録）完了後の取り寄せとなります。

* 資格更新の対象の方には当該年度の4月下旬、全員に送付していますので取り寄せは不要です。

なお、各規則の内容に関するご質問は、事務局では判断しかねますのでご遠慮ください。

■ 「カリキュラムガイドライン01」の取り寄せについて

120円切手を貼った返信用封筒（B5サイズ、必ず宛先を書いてください）を同封して、学会事務局へお申し込みください。

■ 会費（年会費）納入のお願い

年会費は年度内にお納めいただきますようお願いいたします。2002年度分未納の方は3月末日までにお納めください。

正会員	10,000円	学生会員	6,000円
購読会員	6,000円	賛助会員	50,000円/1口

振込先 郵便振替口座 ○ 加入者名：日本音楽療法学会
○ 口座番号：00120-9-657711

■ [訂正とお詫び]

第3号「認定療法士合格者一覧」「資格更新認定者一覧」および「認定療法士(補)合格者一覧」のタイトルに誤りがありましたのでお詫びして訂正します。

誤

正

- | | |
|------------------------------------|---------------------------------|
| 2 頁 【第 6 回全日本音楽療法連盟認定療法士合格者一覧】 | → 【第 6 回日本音楽療法学会認定療法士合格者一覧】 |
| 4 頁 【第 1 回全日本音楽療法連盟認定療法士資格更新認定者一覧】 | → 【第 1 回日本音楽療法学会認定療法士資格更新認定者一覧】 |
| 6 頁 【第 1 回全日本音楽療法連盟認定療法士(補)合格者一覧】 | → 【第 1 回日本音楽療法学会認定療法士(補)合格者一覧】 |

編集後記

さわやかな秋を迎えて、ほっとすると同時に、つい緩みがちになる心身を引き締めようと自分にはっぱをかけている毎日です。全国の会員の皆様はいかがお過ごしでしょうか。

私ごとで恐縮ですがこの8月に、巻頭言を書かれている山松質文先生を中心とした（現在では師岡宏之先生が引き継いでいます）セミナーに2日間参加しました。まさに、「味わう」ことの大切さにじかに触れられたような、充実した週末でした。

その後9月に仕事の関係でウィーンに2週間滞在し、ドイツ語圏の音楽療法にじっくりと触れる機会を持ちました。文献から得られる情報や知識と、なまのからだところで「味わう」体験のあいだにいかの違いがあることかと、今さらながら目からうろこの体験でした。音楽療法とはやはり手作りのもの、マスで促成栽培するものではないのです。臨床現場でも、教育の場でももっともっとじっくりと手間暇をかけながら熟成させていく必要性を感じました。

とは言え、学会員という立場からはそのような悠長なことを言ってもおられず、ここが現実の厳しさです。第2回学術大会の準備が、大前哲彦実行委員長を中心に着々と進められつつありますし、全国の支部組織作りも進んでいます。認定や音楽療法士（補）の試験など、学会が関わる事業も、拡大しつつある会員数と並行してますます煩雑になってきています。学会関係の仕事が舞い込む度に、正直しんどいと思うのですが、近い将来、後に続く人がそれ以上の力量で引き継いでくれるだろうと信じてやっています。

（広報副委員長 加藤美知子）

